

ON AIR

NO.

97

放送大学通信 オン・エア

発行月 平成22年3月

発行 放送大学

〒261-8586 千葉県美浜区若葉2丁目11番地
043-276-5111 (代)



CONTENTS

放送大学教授対談第3回	1
特集「放送大学叢書の魅力について」	5
平成22年度学部・大学院開設改訂科目紹介	8
ICTセンターだより	14
サークルだより	15
学習センターだより	16
退任のごあいさつ	18
インフォメーション	20

放送大学教授対談

第3回

国際連合大学学長・国際連合事務次長

放送大学教授・元国際連合大学副学長

コンラッド・オスターヴァルダール × 鈴木 基之

人類共通の課題「持続可能な開発」に 貢献すること—国連大学学長に聞く

「COP15」に象徴されるように、環境問題は世界中の関心を集めました。国連大学はこの人類共通の課題も含め“持続可能性”にどう貢献していくのか、今回は国連大学コンラッド・オスターヴァルダール学長と環境工学が専門の鈴木基之教授の、研究・教育の場での国連大学の新たな試みとその可能性についてのお話をお送りします。

※本文中は敬称略とさせていただきます。

世界で13の研究拠点をもち、 先進国と途上国の共同研究・運営を目指す

鈴木 国連大学は、大学といっても一般的な大学とは大分違いますね。今日は、国連大学について、どのような使命を担って、こういった活動をしておられ、今後どのような活動をしようとしておられるのかという辺りのお話を伺えればと思います。

オスターヴァルダール 全てにお答えするには5時間くらい必要ですね(笑)。国連大学は1970年代初頭に設立されました。当初の構想は、国連および加盟国のシンクタンクとしての位置付けで、大学を設立しようという試みでした。主に途上国での能力開発を目的に考えられていました。ところが、日本政府は



国際連合大学学長室にて。コンラッド・オスターヴァルダール学長(左)と鈴木基之教授(右)

少し違う構想を持っていたのですね。研究拠点であると同時に、実際に世界中から大学院生を集めたいと考えていたのです。しかしながら、他の加盟国が自国の大学との競争を怖れたこともあり、最終的にシンクタンクとして、日本政府の多大な支援により東京に本部が設立されました。修士課程や博士課程を有する通常の大学の形態とは異なるスタイルで始まったわけです。私は2年前に学長に就任しましたが、どうも大学と名が付きながら研究機関に近いことを奇妙に感じ、また日本政府や国民の方々が必ずしも国連大学の役割に満足していないことを知り、国連

大学憲章の改正を試みました。国連大学が大学院を設置できるようにするためです。そして去年の国連総会の土壇場で、全会一致で認められました。

鈴木 それは素晴らしいですね。

オスターヴァルダー 国連大学と通常の大学は、設立経緯もさることながら、構造自体が大きく違います。通常、大学は1つの国内にいくつか主要キャンパスがあり、最近では海外に小規模のキャンパスを置く例もありますが、国連大学はその逆です。世界中に国連大学の研究拠点が散らばっています。

鈴木 そうした研究拠点は、独自の成り立ちや使命を持っているようですね。その意味で、国連大学の運営は非常に複雑に見えます。東京に本部を置きながら、どのように世界各国に点在した研究拠点をとりまとめているのでしょうか。

オスターヴァルダー 確かに一般的な大学とは運営

が異なりますが、通信技術の発展した現代では、頻りに連絡を取り合うことができますので、地理的制約をあまり感じることはありません。2週に一度、海外の副学長や拠点長とテレビ会議をします。ボンにいる副学長が目の前に座っているの



コンラッド・オスターヴァルダー学長
スイス連邦工科大学学長を務めた後、
2007年、国連大学第5代目学長に就任。

すよ。通常の大学でも、各学部の意向は大抵まちまちで、それをまとめるのは大変ですよ。同じような苦労はあります。ただ、国連大学の場合、移動距離が長いことは確かです。私は年に1回は各拠点を訪ねますし、拠点長会議も年2回集まって、それぞれ丸2日間をかけて行ないます。

鈴木 ところで、途上国の能力開発を目標としながら、現在13ある研究拠点のほとんどは先進国にありますね。実際には国連大学の使命をどのように具体化しているのでしょうか。

オスターヴァルダー それは最も難しい点です。研究拠点が先進国に偏っている理由は明快です。国連大学は学問の独立性を保証するために、国連本部から資金援助を受けないことになっています。そこで、どうしても資金力のある国しかホスト国になれない

のです。日本、ドイツ、オランダ、あるいは中国などといった国では問題はありますが、アフリカや南米の国がホスト国になるのは、資金拠出の面から困難です。そのため、残念ながら途上国での活動が非常に限られています。このジレンマを解決するため、現在、「ツイン・インスティテュート（双子の研究所）」というモデルを提唱しています。全ての研究拠点は先進国と途上国にそれぞれ1ヶ所キャンパスをもつ、という構想です。共同で研究を行い、修士課程と博士課程を共同で運営します。学生は必ず、両方のキャンパスで過ごさないとなりません。この構想の利点は、まず共同研究の成果をホスト国に提出することで、先進国の資金援助を受けられ、さらに、途上国から先進国への頭脳流出を防ぐ役割も果たします。優秀な学生が戻ることができるような研究の場すなわち雇用の場をつくるのですから。この点は非常に重視しています。

人類の大きな課題、サステナビリティ (持続可能性)にどう取り組むのか

鈴木 途上国の数は非常に多いですが、恐らく限られた研究拠点で全てを網羅するのは難しいでしょう。どの地域あるいは分野に絞っているのでしょうか。また、各研究拠点には独自の使命や専門分野などがあると思います。たとえば経済だったりテクノロジーだったり等。こうした点はいかがでしょうか。

オスターヴァルダー 国連大学はこれまで国連に対するシンクタンクとしての役割を担っており、また途上国での能力開発に重点を置いてきましたから、扱うテーマは限られていました。しかし現在では、国連大学が扱うテーマは、個別には平和研究、途上国経済、水資源、農業などさまざまですが、全て「持続可能な開発」に関わるものといえます。物理、化学、生物、文学、哲学といった基礎研究的な分野もあれば理想的ですが、そこまでは考えていません。全ての途上国に国連大学が関与することが使命ではありません。当然地域を選択しないとなりませんが、その際にもホスト国だけではなく、近隣諸国との関わりを重視したいと思っています。例えばガーナに拠点があるとすれば、その近隣国にも積極的な参加を促し、資金援助をお願いしたいと思っています。

そうすることで、国連大学はより広い地域で存在感を発揮し、実際のホスト国の数を上回る国々をカバーできます。

鈴木 確かにサステナビリティ（持続可能性）の問題は、人類にとって今後最も大きな課題になるかと思いますが、国連大学ではこの問題に対して、どのように取り組む予定でしょうか。

オスターヴァルダー この問題は国連大学単独で取り組むにはあまりに大きな問題です。まず、各分野で最も重要となる課題あるいはテーマを線引きしてあぶり出し、そしてサブテーマを決めます。その上で、国連大学が最も貢献できる課題を選びます。その際、課題同士に何らかの一貫性を保つことが大切です。国連大学の研究拠点はわずか13（将来的は20に増える予定）しかないわけですし、それぞれの機関は50から150名程度の人員規模ですから。まず、課題を見つけ出し、選択して、スタートを切ることが大切です。始まってしまえば現地の大学とも協同して進めることができます。最近の言葉ではレバレッジを利かせる、とでもいいでしょうか。梶子の原理で、小さな力で大きな効果を上げる。コラボレーションによって現地に波及効果をもたらすことが重要です。

鈴木 環境、開発、平和、人間の安全保障といったテーマは、サステナビリティの問題を考える上で重要な個別課題です。こうしたテーマを扱う際に、国連大学の立ち位置は恐らく他と違う、特異なものだと思いますが、通常の大学と比較して、一番大きな利点はどんなところにあるのでしょうか。世界の学界に向けて発信できるとか、世界中の科学者を集められるとか…。

オスターヴァルダー 仰るとおりです。差別化をしないと国連大学の存在意義がありません。まず、学問の自律性や独立性が国連大学の強みです。その点では高い信頼を得ています。例えば、何か困難かつデリケートなテーマについて、東京大学が声明を発表したとしても、世界はそれを日本の考えだと捉えるでしょう。ハーバード大学でも同じです。しかし国連大学の場合は、そうではありません。あるホスト国の政府が条件を突きつけてきたとしても、「お言葉ですが、私たちには他に12のホスト国があるん

ですよ」と言うことができます。この点が、世界の国立大学と国連大学の最も大きな違いだと思います。もちろんデリケートな課題を扱うには、非常に高度な調整力も求められますが…。2点目として、国連大学は世界中の大学や研究機関と接点があります。必要であれば実践に長けた優秀な指導者たちを呼び、国連大学の学生に教育してもらうことができます。このように、単に理論を追求するだけの機関ではありません。学生も世界中の国連機関や政府でボランティアをすることもできます。こうした点も、国連大学の利点ではないでしょうか。

将来を担う若者に“持続可能な開発のための教育”を施すことが国連最大の貢献

鈴木 国連の他の機関、例えばサステナビリティの分野で言うとUNEP（国連環境計画）、UNESCO（国連教育科学文化機関）などの機関との関連はいかがでしょうか。日本ではあまり国連のシステムが知られていませんので、ご説明いただけますか。国連大学の最高意思決定機関はカウンシル（理事会）ですよね。



鈴木基之教授
放送大学教授（環境工学）、東京大学
名誉教授。1998～2003年、国連
大学副学長を務める。

オスターヴァルダー それは大変重要な点です。まずカウンシルについてですが、これは学問の独立性を確保するため、国連の政治性は一切考慮されていません。23人の研究者や教育者から構成され、国の代表ではありません。日本人のメンバーもいますが、日本の代表ではありません。政治性は完全に排除されています。

鈴木 メンバーはどのように選ばれるのでしょうか。

オスターヴァルダー 国連事務総長やUNESCOの事務局長が各国の大使館、NGO、政府等に書簡を送り、推薦してもらいます。そしてカウンシルが1つの空席に対し3名を選び、最も適任と思う候補者1名に印をつけ、最終的に事務総長が選任します。次に他の国連機関との関係ですが、国連大学は特にUNESCOとの関わりが深いですね。教育に関わる機関ですから。UNESCOは世界中の大学と共に

「UNESCO Chairs」と呼ばれる大規模な取組みを行なっております。特定の分野の教授ポストを提供し、その地域でその分野の教育・研究を推進しています。この中には国連大学が後援しているプログラムも沢山あります。面白い例をご紹介します。イタリアのトリエステにある研究所は、かつて素粒子物理学を研究する機関でしたが、現在は



東京都渋谷区に1975年に設置された国連大学ビル。専門機関の日本事務所、国連広報センターもある。

UNESCOが所管しています。ここでは途上国で利用可能な、単純な装置の開発を行なっています。例えば、ブリキの石油缶をアンテナに改造する研究にも成功しました。非常に感度のよいアンテナです。興味をそそる成果ですね。国連大学も協力関係にあります。また、WFP（国連世界食糧計画）、世界銀行、IMF（国際通貨基金）、WTO（世界貿易機関）といった多くの国連機関は基礎研究はできませんので、国連大学が協力しています。

鈴木 UNESCOは「持続可能な開発のための教育の10年」（DESD）を提唱していますし、UNUも「持続可能な開発のための教育」（ESD）を研究課題として掲げています。これらは国連システムの中でどのように進められていますか。

オスターヴァルダー 国連大学のこれまでの研究や、今後の修士課程、博士課程では、持続可能な開発の問題に焦点を当てています。将来を担う若者にこの分野での教育を施すことが、国連大学の最大の貢献です。なぜならば、彼らは将来、自国で教える立場に就くか国を支える役人となるからです。横浜にある国連大学高等研究所（IAS）でもESDを推進する活動を行ない、例えば小学校や地域の図書館、大学などが、この分野での教育方法を確立できるようにお手伝いしています。日本政府の支援も受けています。

変貌する世界の中で、国連大学の課題に日本も積極的に参加・貢献することを期待

鈴木 国連大学は農業多様性や乾燥地における水資源管理など、非常にユニークな成果を挙げ、出版物も多く出ていますが、放送大学の学生を含め、多く

の日本人はどこで入手していいかわからないというのが実状です。国連大学の成果を知るには、どうしたらよいでしょうか。

オスターヴァルダー 最も簡単な方法はホームページ（<http://www.unu.edu/>）を見て頂くことです。今年中に全面改訂する予定ですから、一段とわかりやすい構成になると思います。また、大学内には出版局があり、

渋谷区青山の建物の2階に出版コーナーを設けています。ここでは、毎週土日に、正面広場でファーマーズ・マーケットを開催しています。農家の方々が新鮮な農作物を販売していますが、毎月来訪者が増えています。出展者の人たちも大変喜んでいて、開催中は建物への出入りも自由です。こうした試みを通じて、国連大学は日本の皆様のものでもあることをぜひ実感して頂きたいと願っています。

鈴木 最後に、放送大学の学生そして日本の学生にメッセージをお願いします。

オスターヴァルダー 将来の計画を立てるとき、どうぞ国連大学のホームページを見てください。もしかすると、興味を持っていただける研究プロジェクトがあるかもしれません。それはマカオで実施されているものかもしれませんし、クアラルンプールかもしれません。あるいはボン、ヘルシンキかもしれません。東京の可能性だってありますが、その時にはツイン・キャンパスとなるガーナでも学ぶことができます。

鈴木 変貌の激しい世界において国連大学の果たすべき役割は非常に大きく、また厳しい経済情勢の中でこれを実現していくことは大変なことと思います。しかし、持続可能な開発を実現する上で、途上国に対する働きかけや、新しく大学院教育を行う計画を進められるなど、世界的に求められている種々の課題に積極的に立ち向かおうとしておられる学長の姿勢は多くの共感を生むことと思います。日本もホスト国として、国連大学の活動を支援し、そこに参加する形での国際貢献が一層進展していくことを期待したいと思います。

今日は有難うございました。

放送大学叢書の魅力

放送大学叢書は、放送大学の授業で用いる印刷教材や、すでに閉講された科目の中に蓄積された貴重な講義録をもとに、読みやすく編集し、より広い読者層を対象に出版されたものです。昨年3月より刊行を始めてすでに8冊の叢書が誕生しています。本号では、叢書の立ち上げにご尽力いただいた柏倉康夫先生（前放送大学副学長・図書館長）と左右社の小柳学さん、現叢書委員会委員長・図書館長の松村祥子先生に「放送大学叢書の魅力」と題してご対談いただきました。（以下、敬称略）



（左より）柏倉康夫先生、松村祥子先生、小柳学さん

学生の声を参考に生まれた 放送大学叢書

松村 本離れの時代と言われて久しいのですが、それでもさまざまな新刊書が書店に並びます。そういう中で放送大学叢書の出版を計画されたのはどのような理由からでしょうか。

柏倉 私が副学長を務めていた時に図書館に参りましてびっくりしたのですが、今まで放送に使われたものや閉講になったものの印刷教材がズラッと並んでいました。2千弱の講義の教材、およそ4千冊。このまま図書館に眠らせておくのは実にもったいない。新しい情報を加えて一般の方でも読めるようにリニューアルし、広く社会に提供する-それはとても意義あることだし、義務ではないかとさえ考えたのです。そして石学長の見識のもと、「アクションプラン」として採用されスタートしました。

松村 放送大学に蓄積された知的な財産を叢書という形で社会に還元する、というのは大学の使命であり、とてもすばらしい企画ですね。その膨大な印刷教材の中から叢書にふさわしいものを、どのようにして選ばれたのでしょうか。

柏倉 実は、創刊に先立ち小柳さんとマーケティングリサーチを行いました。神奈川学習センターに学生の方々にお集まりいただき、どういうものを読みたいか、本の分量・装丁は、価格は、等をお聞きしたのです。それが随分と参考になりました。科目の受講者の多寡も一つのフィルターになっています。

松村 これがよかろうと一方的に提供するのではな

く、読み手の反応を見ながら作った、ということですね。すでに8冊が上梓されていますが、『茶の湯といけばなの歴史』『自己を見つめる』も人気科目の教材から生まれました。反響はいかがですか。

小柳 評判いいですね。教材として『茶の湯〜』『自己を〜』に接してこられた方々には、お手にとってきれいな本になった、と喜んでいただいています。そうでない、初めて手にされた方々からは、専門的なのに読みやすく入門書になった、とてもありがたい、という感想を多くいただいています。

日本人の美意識や精神性をひもとく 『茶の湯といけばなの歴史』



松村 『茶の湯〜』の副題には「日本の生活文化」とあります。日本では伝統的になかなか生活と文化は結びつかないのですが、「生活と芸術とがいかにかかわりながら、日本的な美的生活を生みだしたか、歴史的にたどることにした」の前書きの一文に惹かれて読み始めたところ、生活の中から生まれた美しいもの、綺麗なものが文化というカタチとなり、それが逆に生活を豊かにする、という分かりやすい構成になっていますね。

小柳 茶の湯といけばなと日本料理。これら3つを生活文化という概念で結び、一つの文化史として描いていますが、他に類書がありません。茶の湯と普段の料理がどうつながっているのか、茶の湯といけばなは、といった広がりをおの本は提示しており、茶道やいけばなを嗜まれる方はもちろん、読まれた方はこれまで以上に生活に“美”や深みを感じるこ

とができると思います。

柏倉 日本人の美意識や精神性といったものがこういうところから生まれてきた、こんな影響を受けて進化した、というのがとてもよく分かります。

学生の熱い要望から生まれた 哲学の名著『自己を見つめる』



松村 一方で『自己を〜』は現代を悩み生きる皆が求めているものです。さまざまな反響があったと思いますが。

小柳 著者の渡邊二郎先生は一昨年泉下の人となりましたが、訃報に接し号泣した一人だがこの本を通して触れた先生の言葉に改めて心震えた、と何人もの方からご感想をいただきました。

柏倉 今、人生論というものになかなか出会えない時代です。私たちの若い頃は『三太郎の日記』など、一度は読んでおくべきものがありました。『自己を〜』は生きる指標に富んだ人生論として読めますね。

小柳 〈不幸〉の章で渡邊先生は「幸福は（中略）、不幸を介して、その姿を浮かび上がらせてくる失われた桃源郷である」と書かれています。また〈古い〉では「周りの人々が、ほんとうは何者であったかが、ようやく分かるのは、老年になってから」と。これらの言葉には、“プラトン、ソクラテス”の引用ではない先生ご自身の経験に裏打ちされた人生哲学が込められています。放送大学の学生の方々は人生を積まれて学ばれているわけですが、その人生経験という部分で互いに共鳴するものがあるのではないのでしょうか。

柏倉 実は、『自己を〜』には誕生秘話があります。熱心な複数の学生の方々からお電話やお手紙でリクエストがあったのです。ぜひ渡邊先生の講義を叢書で取りあげてほしい、と。

松村 渡邊先生はとても学生の方をいつくしんで接しておられました。そんな中からこの本は生まれたのですね。『私たちはメディアとどう向き合ってきたか』は柏倉先生の著作ですね。

情報歴史学の新たなこころみ 『私たちはメディアとどう向き合ってきたか』



柏倉 これは放送大学で担当した3つの授業をベースにしていますが、ほとんど新たに書き

下ろしたものです。私たちの知識というのは、あらゆる意味でメディアを通じて伝えられています。そのため、メディアがどういう成り立ちをし、どのような特徴を持っているかを歴史的にたどる必要がある、そして学問として確立しなければ、と考えておりました。〈6つの物語〉で構成されており、日本に新聞が登場した経緯、写真という表現手段が生まれた経緯…など各メディアの歴史に光をあてています。インターネットという新たなメディアが登場し、情報発信のあり方が問われている今こそ、旧来のメディアの役割について、もう一度考える時期に来ているのだと思います。そこで「メディアロジー」という新たなメディア論も紹介しています。そういう意味で過去・現代・未来を俯瞰した「情報の歴史学」としても読めるものです。

松村 私も読んでみて、メディアが多種多様になって行く中で、それぞれの時代に求められた、例えばジャーナリストの姿勢、写真家の姿勢といったものがよく理解できました。当該分野の学問の最新の成果、到達点といったものが平易な言葉で書かれているのが放送大学叢書の特徴ですが、また、まさしく『私たちはメディアと〜』のように、将来に視点を置いた問題提起も叢書の特徴ですね。印刷教材とはまた違った可能性があるように思います。

世代を超え、立場を超え、 読み継がれる愛読書に

小柳 編集に携わってずっと思ってきたこと—それは「学問は二度やってくる」ということです。一度目は10代、20代のころ。二度目は社会人としての人生を経験してからです。その時、たとえ若い頃と同じテキストを手にしても違ったものとして読めるはず—もっと深みのあるもの、新たな発見を見出せるものとして。この叢書が一度目、二度目の学問への端緒になってくれることを願ってやみません。実は昨日、放送大学の学生の方から、理系の科目をとっているが入門書のようなものはないか、との問い合わせのお電話をいただいたので、『動物の生存戦略』をお奨めしたばかりです。

柏倉 嬉しいことがありました。電車で前に座られたご婦人が『徒然草をどう読むか』を読んでおられ

る。装丁のデザインは特徴がありますから（水玉模様）、すぐ分かりました。印刷教材は赤ペン片手に机の上に広げて読みますが、叢書なら一般の人でも電車の中、日常の生活の中で気軽に最先端の知識に接することができます。学生の方々からも、リラックスして読めた、授業以外の分野にも関心を広げて読んでみたい、との声が届いています。

松村 すばらしいですね。印刷教材から出発してい

ますが、新しい姿になって新しい発信をしているようです。社会が混迷し、誰もが進むべき方向を見失いがちな今こそ“指標”が求められています。叢書を通して、ふと知的な「気づき」、希望という「輝き」のようなものを発信できたらと思います。柏倉先生、小柳さんのおっしゃるように、世代を超え、立場を超え、叢書がまさに人生の愛読書に育ってくれたら、と切に思います。

放送大学叢書既刊ラインナップ

003



笠原潔

『音楽家はいかに心を描いたか
バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、
シューベルト』

バッハの「マタイ受難曲」にある「私の心は涙の中を泳ぐ」。バッハはこの箇所水泳の様子を表現した。音符のつらなりから、その泳法は「平泳ぎ」であることを著者は解き明かす。イエスの物語を見事に描いたバッハをはじめ、恋に「人間心理」を読んだモーツァルト、英雄ナポレオンの「気宇壮大」をつくったベートーヴェン、「空虚」に降り立ったシューベルトらの物語。音楽家との対話から「人間」が見えてくる。

故・笠原潔教授、
辻莊一・三浦アンナ記念学術奨励金を受賞

立教大学の第22回辻莊一・三浦アンナ記念学術奨励金が放送大学の故・笠原潔教授に与えられ、去る1月23日に同学内の教会で授賞式が行われました。氏が放送大学の『西洋音楽の諸問題』（2005）の中でキリスト教音楽と日本人の関わりを極めて斬新な方法で明らかにしたことが評価されたことによるものです。講演の代わりに氏の放送教材が紹介されました。丹念な調査による新しい資料と新しい見方を何気ない言葉で述べる氏のすごさは、参加者に大きな感動を与えました。なお、放送大学叢書の一冊として、笠原教授の『音楽家はいかに心を描いたか』（左右社、2009）が刊行されました。音楽を人間と社会から孤立させずに見る方法が見事に結実したものです。（徳丸吉彦・放送大学客員教授）

004



島内裕子

『徒然草をどう読むか』

徒然草の有名な話のほとんどは前半部だが、本書はその後半部に兼行の人生観の転換を読み解き、また各章の関連を明らかにしながら、従来知られていなかった古典の全体像を解明する。そして、「物事は両面を見ること」など、世界の見方、恋愛のあり方、酒の飲み方から、お金の使い方まで、読んでもらうと思う徒然草のことばを紹介。ものを書きながら「人生の達人」と呼ばれるようになった、その軌跡を追う。

005



森谷正規

『比較技術でみる産業列国事情
アメリカ、中国、インド、そして日本』

かつて日米欧が中心だった世界経済は、いまや中国、インドをはじめ新興国が台頭する「産業列国」の時代にある。モノからカネに熱狂の対象が移ってしまったアメリカ、中央政府も地方政府もモノとカネに走る中国、中国に10年遅れて開放政策をしたインド、資源に恵まれたブラジルやロシア……。技術は優れている日本が、なぜ後発国に抜かれるのか。様変わりする世界のモノ作りと、日本人が生き抜く経済戦略を示す。

006



渡邊二郎

『自己を見つめる』

日本を代表する哲学者が「孤独」「愛」「運命」「死」などの人生のテーマで、悩み多き読者に贈り届けるように語る。「自分の周りの人々が、ほんとうは何者であったかが、ようやく分かるのは、老年になってからである」（「老い」）、「生きるということとは、欠如の意識にもとづき、それを充足させるという運動と情熱において成立する」（「不幸」）など珠玉の言葉が並ぶ。放送大学空前の人気授業といわれたテキストを叢書化。

001



熊倉功夫

『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』

生活と芸術が結びついた「生活文化」こそ日本文化の柱。茶の文化を根付かせた栄西、「ばさら」の代表的人物佐々木道誉、いけばなを大成させた二代池坊専好、わびの美学を説いた村田珠光、茶の湯を完成させた千利休……。きら星のごとき歴史的人物を登場させながら、茶の湯といけばなを中心に、その視野を桂離宮の美意識、日本料理における食礼、柳宗悦の工芸運動にまで広げて、日本人の民族性と日本文化の底流を見ていく。

007



柏倉康夫

『私たちはメディアどう向き合ってきたか
情報歴史学の新たなこころみ』

新聞、写真、映画、そしてインターネットや電子本まで、メディアの創成期の史実を豊富なエピソードとともに伝える。明治初期、新聞は政府などの権力と一線を画すべくして、自ら新聞を創刊した英国人ジョン・ブラック。海底ケーブルは通信時間が短縮され世界の「共通時間」が出現したが、それは時間意識をテーマとした『失われた時を求めて』や『ユリシース』といった文学につながっていく。メディアと情報の光彩を描く6つの物語。

002



長谷川眞理子

『動物の生存戦略 行動から探る生き物たちの不思議』

クジャクの雄は見事なまでに派手な羽を持つのに、雌はそんなものはもたない。なぜ雄と雌でこんなに違うのか？ 本書には、怪我をした振りをするチドリや、ふとん係がいるデバネズミをはじめ、動物たちのさまざまな生存戦略が紹介されている。まるごとの個体としての動物が、どのように餌を探し、周囲を探索し、配偶相手を見つけ、子どもを残していくのか。生物学の理論とともに、驚きの動物世界を解く行動生態学入門。

008



杉村宏

『人間らしく生きる 現代の貧困とセーフティネット』

競争に負けた貧困は、自助努力や自己責任の問題といわれた。果たして、貧困とはそんな軽い問題なのか。現在、日本は貧困率先進国第2位。毎年3万人の自殺者。そんな現実を前に不安を消すことはむずかしい。すべての人々が差別されることなく「人間らしく生きる」ためには、貧困や人間という存在をどう見る必要があるのか。貧困とその対策としての公的扶助の発展を歴史的に考察し、格差社会からの出口を示す。

社会学入門('10)

首都大学東京教授
(放送大学客員教授) 森岡 清志



森岡 清志 教授

社会学は、法学・政治学・経済学と並ぶ、社会科学の一分野です。社会科学では、人間を社会的存在として捉えるという基本的視点に立って研究を行っています。社会学も例外ではありません。ただ社会学が他の分野と異なる点は、社会的存在としての人間を、社会諸関係の中に生きる存在として、他の分野よりも幅広く捉える点にあります。

社会諸関係の中で私たちにとって最も身近な関係は人間関係です。社会学は、人間関係に影響され、また逆に人間関係に影響を与えている存在として人間を捉え、その意識と行為をまずは対象とする学問であるとも言えるでしょう。この講義の前半では、人間が社会関係の中で成長してゆく過程にできるだけそって、社会学の基本的概念について説明してゆきます。社会学の概念は、社会学の基本的なアイデ

アを短い言葉に凝縮して表現したものであり、何が重要であるのかを識別し、説明し、分析するための道具ともなる

ものです。概念は分析の出発点となるものです。ですから、概念をまず学ぶことは、基礎をしっかりと固めるために決定的に重要なこととなります。講義は古典の紹介ではなく、私たちの生きている世界の中で社会学の概念がどのような意味をもっているのか、この点をよく説明するように心がけています。後半では、現代日本の社会の諸問題についても取り上げます。

「社会学って、どんな学問なんだろう」と思っ
ていらっしやる方々が幅広く受講し、理解を深めてゆくことのできるような講義にしたいと思います。

地域福祉の展開('10)

日本福祉大学教授
(放送大学客員教授) 平野 隆之 日本福祉大学准教授
(放送大学客員准教授) 原田 正樹



平野 隆之 教授



原田 正樹 准教授

「地域福祉の展開」は、従来の地域福祉論の教科書や講義と比較して、少なくとも次の2つの特徴を持つ。1つは、地域福祉論の展開ではなく、展開している地域福祉の現実に寄り添った内容を出発点としていることです。もう1つは、地域の特性や時代の環境を踏まえた地域福祉の展開になっていることです。

本講義は、次の5つのパートから構成されています。A：地域福祉計画（市町村）、B：地域福祉プログラム（都道府県）、C：地域福祉活動・方法（援助機関）、D：歴史（住民）、E：理論・国際比較（研究者）。括弧内に示した地域福祉を推進する主体は、展開する地域福祉の舞台に参加・登場するアクターのリストといえます。市町村・都道府県や援助機関はもとより、地域福祉については、住民が重要な役割を持

ちます。住民のなかでも、福祉課題を抱える当事者を中心に取り上げたのも今回の特徴といえます。

さらに、本講義の実験としては、地域福祉の推進に対して、理論面と政策・実践面で貢献が期待されているわれわれ研究者をも取り上げました。「地域福祉の展開」への主体的な参加についての受講者による学びを多く提供したいという思いから、大胆な試みを行いました。その結果、講義の内容にリアリティを持ちこむことに成功したつもりです。

多様なアクターによる、多様な地域福祉の展開、そして多様な地域福祉の解釈が成立することを期待しています。

アジアの社会福祉（'10）

仙台白百合女子大学教授
(放送大学客員教授) 萩原 康生

「未知の世界を探る喜び」、「新たな出会いを楽しむ喜び」…、これらが学びの根幹です。アジアの福祉の研究をしていて、多くの人と出会いました。鹿児島島のホスピス医の堂園晴彦先生との出会いもその一つです。堂園先生はホスピス医であるとともに、医学生をマザー・テレサの施設に派遣する、「風に立つライオン」というNPOを組織されています。また、最近「水平線の向こうから」（明月書店）という絵本を出されました。「幼い娘を遺して旅立つ母と、涙をこらえて見送る少女の物語」です。

「死」は、避けることのできない事実です。この「死」が社会福祉と深い関わりのあることは、よく知られています。「人間の安全保障」というのは、まさに「死」の恐怖から人間を守る働きです。また、今回の課題である「人権保障」というのは、究極的

には「死」といかに向き合うかということであり、もう一つの課題である「グローバルゼーション」は、地球規模で広がった人間の生への挑戦をあぶり出すことです。

私は学生に、「富士山はなぜ高いのか？」という質問をします。答えは、「すそ野が広いから」というものです。アジアの社会福祉を学んで、何の役に立つのかと思われる方がいるかもしれませんが。しかし、この学びは人間として、「生」の頂点を極める一つの手立てです。

社会福祉は、人間の幸せを追い求める学問です。この科目を学習する方々は、アジアの社会福祉を学び、知識はもとより、人間としてすそ野の広い方になっていただきたいと願っています。



萩原 康生 教授

現代の教育改革と教育行政（'10）

放送大学教授
(心理と教育) 小川 正人

1990年代後半以降の分権・規制改革や構造改革の下で、教育の「構造改革」と呼ばれる教育改革が進められてきた。この直近の改革が、教育の「構造改革」と言われるのには理由がある。それは、従来の教育改革が、既存のシステムをそのままにした上で、カリキュラムや教授方法等を主な課題としてきたのに対して、直近の教育改革は、既存システムの諸権限を再配分することを通して教育統治（ガバナンス）のあり方そのものを見直すことを中心的な課題としていることである。教育の「構造改革」は、政治や一般行財政から一定の距離を置き、教育の独自性、特殊性の論理を重視して構築されてきた従来の教育行政や学校のあり方を見直し、効率化と社会への説

明責任を厳しく問いたす改革となっているため、改めて、教員の仕事や学校の組織運営、教育行政のあり方等が大きな争点になっているという点でも特徴的である。

今日の教育改革が、教室や学校の中における教育活動の場面だけでなく、学校の管理・経営や地域・自治体の教育政策、更には、国全体の教育政策やシステムのあり方等といったメゾ・マクロな変動と一体的に進んでいることから、政策と法・制度、管理・経営を総体として研究対象とする教育行政研究の視点から教育改革を学習する意味は大きいと考えている。



小川 正人 教授

財政学('10)

一橋大学教授
(放送大学客員教授) 佐藤 主光

わが国の財政が大きな転換点を迎えています。2009年夏の総選挙の結果、政権交代が実現、民主党を中心とする新たな政権は「脱官僚」と「政治主導」を掲げ、新たな政策を打ち出しています。「事業仕分け」は政府の予算過程を透明化、「子ども手当」は公共事業偏重の予算配分から対人給付に政策の軸を移すものでした。しかし、その一方でわが国の財政は悪化の一途を辿っています。社会の高齢化は将来的に年金や医療など社会保障費を高めるでしょう。財政赤字の是正、社会保障の財源の確保といった難しい政策課題に政府は直面しているのです。経済成長が、こうした課題を自ずと解決することは期待できません。高度成長の時代は過去のもので「日本経済はもはや一流とはいえない」のです。

財政学の講義では、税制や社会保障、予算など現

行の制度を詳細に説明することを目的とはしていません。

これらの制度が大きな変化に晒されているのです。むしろ、

変化に際してもぶれない「普遍的」な視点が必要だと思えます。そこで、本講義は、経済学の視点から、財政のあるべき役割と実態について考えていきます。経済学のツールを多用するため、ちょっと難しく感じるかもしれませんね。しかし、敢えて言えば、難しいのは経済学ではなく経済なのです。その難しい経済に本講義は切り込んでいきます。年金や消費税など現実の問題に対して、(友愛のような)理念や(こうあって欲しいという)願望ではなく、客観的なエビデンスと冷徹なロジックに拠って考える力を身につけてもらうことが狙いです。



佐藤 主光 教授

現代東アジアの政治と社会('10)

放送大学教授
(社会と産業) 西村 成雄 慶応義塾大学教授
(放送大学客員教授) 小此木 政夫

現代東アジアの経済的相互依存関係の深まりは、貿易総額に占める域内の貿易比率の増大として示されています。1980年の35.7%から20年後の2000年には52.9%になり、2007年では56.4%に上昇しています。同じ2007年のEU域内は67.2%で、NAFTAでは43.0%でした。

こうした経済面での潮流は、もはや一国単位では測定できない一つの新しい東アジアというまとまりを形成しつつあるといえるでしょう。

「現代東アジアの政治と社会」は、このような構造的変容を踏まえて、5人の教員の専門性を生かしつつ、現代東アジア世界のいくつかの国家・地域の分析に取り組みました。20世紀全体を眺望できるような奥行きのある歴史認識と、相互依存関係がもたらす新たな国際秩序のプラットフォームの特徴を解

明しようとしています。

まず、それぞれの国家・地域を「政治と社会」の相互緊張関係のなかからとらえなおし、そこで生み出された政治体制の原理と構造、またその変容の可能性とその現実性を再検討しています。次に、事実上の東アジアの経済的共同体形成にみられるような新たな条件が、どのようにそれぞれの国家・地域に影響しているのか、逆にそれぞれがどのように東アジア世界に一体化しつつあるのか、その相互浸透性を考えていきたいと思っています。

このような複眼的視野から、21世紀の東アジア世界がグローバルな存在として、今後どのような展開をたどることになるのかを考えていくうえで、受講される皆さんの積極的な参加を期待しています。



西村 成雄 教授



小此木 政夫 教授

健康科学の史的展開（'10）

放送大学教授
(生活健康科学プログラム)

多田 羅 浩三

関西大学教授
(放送大学客員教授)

高鳥毛 敏雄



多田 羅 浩三 教授



高鳥毛 敏雄 教授

わが国は、男女ともに平均寿命世界一の記録を1986年に達成しました。平均寿命世界一の社会は、医学研究の興隆、医療制度の充実があって、人々の死亡との闘いがすすみ、死亡率の大きな低下が達成された社会であるといえます。

問題は、平均寿命が世界一になったということは、世界一健康な人たちからなる社会になったということではないということです。それどころか平均寿命世界一を達成した社会は、多様な健康状態の人たちが世界一多く生活している社会であると考えなければなりません。とくに高齢者人口の大きな増加がある中で、介護を要する人や社会のサポートを要する人が世界一多く生活している社会です。

このような状況の中で、わが国の医療や保健、福祉の制度は、今日、前代未聞の改革の渦中にあると

いっても過言ではありません。

そしてそこでは「社会の制度」の充実に対して「個人の知恵」の強化が強く求められているということがあると思われます。そうだとすれば、今日すすめられている「社会の制度」の抜本的な改革の意義について、長期的な視点、より広い視野のもとに理解を深め、「個人の知恵」に向けた大きな期待に的確に応えるようにすることが重要なはずで

す。本科目では、このような認識のもとに、人々の健康や生活をささえてきた健康科学について、歴史に学ぶという観点に立って、医学の歩みやイギリスにおけるプライマリケア体制の発展の系譜をたどり、現代の地平、21世紀における展望という面から考えてみたいと思います。

コミュニティ教育論（'10）

放送大学准教授
(教育開発プログラム)

岡崎 友典

北海道教育大学教授
(放送大学客員教授)

玉井 康之



玉井康之教授(左)と岡崎友典准教授(右)
□ケ地:北海道・旭山動物園にて

本科目では、学校教育、社会教育そして家庭教育が、地域社会のなかでどのような形で実践されているかについて、「コミュニティ教育」といった新たな概念を用いて考察しています。地域社会の急激な変動により、学校や家庭だけでは解決できない、多様かつ深刻な「教育問題」が多発するなかで、今、「地域の教育力」への期待が高まっています。

教材では、教育学、教育社会学の理論を学ぶとともに、全国各地の実践事例を詳細に検討しつつ、その解決の糸口を探りたい。とくに人間のもっとも基本的な教育環境である家庭と学校が、地域住民の諸組織や機関との連携協力により、どのような形で地域社会＝コミュニティ形成の担い手（主体）を生み

出しているかについて、「現代日本の教育課題」として提示することを目的としています。

教育行政、学校、公民館などコミュニティ教育を担う専門職者、また民間の地域教育人材（コーディネータ、マイスター、ファシリテータの呼称で呼ばれる）の養成・育成に資することができればと思います。したがって、大学院の関連科目だけでなく、学部段階の教育・心理学関連科目、とくに地域社会学、コミュニティ論などについてあらかじめ学習し、また印刷教材と放送教材（テレビ番組）を、並行して学習していただければ幸いです。

公共哲学（'10）

放送大学准教授（社会経営科学プログラム）山岡 龍一 早稲田大学教授（放送大学客員教授）齋藤 純一



山岡 龍一 准教授



齋藤 純一 教授

「公共哲学」というのは、比較的新しい言葉です。これは、公共性という主題を、学際的に再検討する学問を意味し、本講義でも政治理論の他に、倫理学、法学、経済学の方法が紹介されています。複眼的方法で、現代における公共性の問題を、その解決不能にみえるディレンマを含めて明確化するのが、この科目の目標です。

公共事業という言葉があるように、これまで「公共性」は、国家の活動と結びつけられてイメージされてきました。しかしながら、NPOや種々のボランティア活動のように、市民の積極的な営みの公共性が、次第に注目をあつめてきています。さらには、テクノロジーの発展が、既存の公私の区別を揺るがす事態を生み出しています。例えば、個人の「つぶやき」が公共的な関心事となったり、個人の身体の

健康が、公共的な価値をもつと認識されるようになっていたりしています。

本講義は、公共性の意味や公私の区別の問い直しといった現代的課題を遂行するのに役立つと思われる、いくつかの代表的な理論を紹介し、さらには、憲法、表現の自由、生命・身体、労働、社会保障、デモクラシー、NIMBY問題、グローバルな環境問題といった、いくつかの具体的で、わたしたちに真剣な再考を要求する主題を取り上げます。

分野に関係なく、何かの学問を既に学んだ学生が、その視野を、他の学問との関係や、現代社会の問題との連関において広げようとするとき、この科目が役に立つことを望んでいます。

計算論（'10）

放送大学准教授（自然環境科学プログラム）隈部 正博



隈部 正博 准教授

現代社会ではコンピュータなしでは生活できません。では「コンピュータ」とは一体何でしょうか。コンピュータは様々な計算をしてくれますが、では「計算」とは何でしょうか。これら漠然とした問題に、数学的情報科学的な観点から考察しよう、というのが本講義の目的です。

我々は様々な計算をします。この「計算」という言葉を広い意味にとってみましょう。人は考えながら行動しますが、この「考える」ということも、広い意味での「計算」といえるでしょう。人と話すときも、一種の「計算」をしているのです。なぜでしょうか。人は言葉を使って話しますが、その言葉は「文法」という規則に基づいて作られます。文法とは、正しい文章を作るための規則、いや、アルゴリズムと言えます。そして文法というアルゴリズムに従う

からこそ、他人と言葉を介してコミュニケーションできるのです。従ってこれも一つの「計算」と見れます。このよ

うに計算と言語とは密接な関係があります。例えばチョムスキーの定義した文法です。本講義は、（形式）言語に興味のある人向けでもあり、従ってできるだけ予備知識なく学習できるよう配慮してあります。

チューリングは1936年、コンピュータという概念の数学的モデルとして、チューリング機械（本講義の主要テーマ）を考案し、計算機科学の父と言われています。2012年はチューリング生誕100周年で、イギリスでは多くの記念行事が準備されています。わざわざイギリスに？、と思われる方、本講義はいかがでしょうか。



豊かな学びのために UPO-NET

ICT活用・遠隔教育センター 特任教授 平野 秋一郎

大学でeラーニングを活用しようという機運が高まっています。深刻な問題になっている学生の学力低下を解決するには、eラーニングが有効と考える大学が増えているからです。

多くの大学が補習教育、リメディアル教育を始めていますが、そのための予算、教員、教材、時間は十分ではありません。そこでeラーニングを使って、学生が自宅や大学のパソコン教室などで学んだり、入学前に自宅や高校で学んだりできるようにして、基礎学力の底上げを図っています。

ICT活用遠隔教育センターでは、こうした大学のeラーニング活用を支援し、大学のeラーニングの普及、定着を図るため、大学にeラーニング教材を配信する「UPO-NET」プロジェクトを進めてきました。数学、物理、化学、生物や英語などのリメディアル教育教材を中心に提供しています。現在行っている試験配信（トライアル）では21大学延べ1万5000人が受講しており、大学のeラーニングニーズの高さがうかがえます。

UPO-NETは4月から本格サービスを実施する計画です。全国の大学のeラーニングのニーズに応えるとともに、放送大学の学生に対するサービス

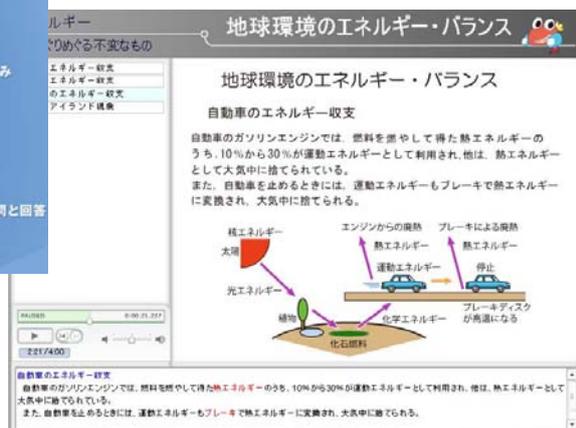
も準備しています。画像やビデオなどの資料、基礎教育の自習用教材、ドリル教材などをUPO-NETで提供し、放送で学ぶ学生により学びやすい環境、学生1人1人が自分のスタイルで学べる環境の実現を目指しています。

学術の先端化、細分化で学ぶ内容が増え、大学のユニバーサル化で多様な学生が大学で学ぶようになりました。国際化、学際化も進んでいます。学びの内容、環境は大きく変わっています。教室での授業だけでなく、放送やインターネット、モバイル機器などメディアを活用して、学生が自分に適した場所、時間で学習できる環境づくり、学びを深く豊かにするために映像や音声をはじめさまざまなデータを提供することが求められています。教員と学生、学生同士、また大学と社会とのコミュニケーションの創造も新しい学びには大事です。

これを実現するために、ICT（情報コミュニケーション技術）の活用は不可欠です。大学のeラーニングの広まりは、こうした学びの広がり基礎を作るものです。「UPO-NET」プロジェクトでは、全国の大学、そして放送大学の学びがより豊かなものになるために貢献したいと考えています。



「UPO-NET」のホームページ



「UPO-NET」の教材(物理)

心に愛を、唇に歌を。

群馬学習センター〈放送大学群馬混声合唱部〉

歴史 平成2年の第1学期終了後、「学生同士、学生と教職員が懇親の機会を持ち、また励まし合い勉学に励もう」という主旨で、群馬学習センターと学生たちが力を合わせ若宮フェスティバル（「若宮」はセンターのある前橋市の町名）と称する納涼文化祭を群馬学習センターで盛大に開催しました。そのフェスティバルは大成功で、最後に「放送大学学歌」の斉唱で幕を閉じました。その感動が冷めやらぬ中、自然発生的に合唱部を作ろうという機運が高まりましたが、その願望は1年後の秋に実を結びました。放送大学群馬混声合唱部が大学の認可を得て、正式にサークル活動を開始したのです。群馬学習センターにおいてごく初期に発足したサークルですが、それ以来途切れることなく活発に活動を続けています。

目的 本サークルの目的は、歌うこと、音楽に関する知識を深めること、音楽を通して学生同士の交流の場を作り相互に親睦を図ること、学習について情報交換を行い学習意欲の向上を図ること、などです。合唱をする前には、発声練習を行い、また良い発声のための柔軟体操などを行います。これらは健康増進にも役立っています。

活動状況等 創部以来、音楽大学出身あるいは放送大学出身で音楽に精通した専門の先生から指導を受けています。練習では、幅広い音楽分野の中から洋の東西を問わず、クラシック、ポピュラーをはじめ、誰もが知っている懐かしい古い歌、初めて耳にする新しい歌、馴染みの深い叙情歌や歌曲などから数

曲選んで歌唱しています。新しい試みとして、最近「日本の歌百選」から選曲して、童謡唱歌なども練習しています。

練習は月3～4回程度、主に土曜日と日曜日で、多忙な先生のスケジュールの合間を探して行っています。練習会場は主に学習センターの講義室ですが、面接授業などでそれが使用できない時は近くの公民館などの施設を利用しています。練習の成果は、大学の入学者の集い、学位記授与式、同窓会の会合などで発揮しています。会合の趣旨と雰囲気合った歌を披露しており、大変好評を得ています。

構成 現在の構成員は、ソプラノ4名、アルト3名、テナー3名、バス3名、合計13名です。その他本学の先生が1人います。サークルは、部長1人、会計1人、書記1人で運営しています。

今後の課題 今後の課題として、放送大学の他センターのサークルとの交流はもとより、できれば学外の同種サークルとの交流が活発になればよいと思っています。現在在学中でサークル活動に参加する人数が少ないという問題点があります。会員資格として学生以外の一般人を認めると参加者は増えると思われれます。しかも、これは放送大学のPRにもなり、大学に入学する人も出てくるかも知れません。

最後に、私たちは放送大学の発展とともに、放送大学群馬混声合唱部の充実に努めていきたいと思えます。

放送大学群馬混声合唱団 部長 関口正夫



学位記授与式祝賀会にて

入学者の集いにて



1年を省みて
反省会



学位記授与式にて



祝賀会

秋田学習センターの紹介と近況報告

北東北の日本海側に位置する秋田県は、人口が約109万人、そのうちの約3分の1が秋田市に集まっています。県の面積が全国でも4番目に広く、人口密度は全国で2番目に低い県となっています。世界遺産の白神山地をはじめとして、海に山にと自然の豊かな心いやされるところです。そのような地域に秋田学習センターがあります。

秋田学習センターは秋田大学手形キャンパス内のベンチャー・ビジネス・ラボラトリーの4階に合築されました。放送大学の学生は秋田大学附属図書館も利用でき、恵まれた学習環境になっています。また、

県南の横手市の市民会館内に再視聴施設を開設し、県南の方々に利用してもらっています。

学習センターの活動と行事

秋田学習センターには560名弱の学生が在学しています。現在4名の客員教員がおり、面接授業、学習指導・相談、講演会、卒業論文や修士論文での助言等で活躍しています。また、学生の興味に応じて客員教員が専門性を生かしてセミナー（哲学、英語、生理学など）や実験を交えた化学セミナーを開いており、授業とは異なった形式で学生と教員が和気藹々のコミュニケーションを持ち、学生は楽しみながら学問に親しんでいます。

学生研修旅行は人気のある行事で、歴史探訪、民俗探究が多く、今年度は9月に環状列石遺構めぐり、



学生研修旅行



連携セミナー

そして江戸時代に県北地域の人々に貢献した医師、安藤昌益の偉功を訊ねました。参加者は訪ねた場所々々で学芸員の説明に興味深く聞き入っていました。同じく2月に学生交流会を開催、客員教員による講演会の後、親睦を図る予定です。

また、センターの職員は県内を万遍なく回っているいろいろな職域の方々に放送大学の内容を知って頂くための機会を多く持つようにしており、その一環として、今年度は県立図書館と連携して3回のセミナーを開催しましたが、大変好評でした。

学生の活動と同窓会

現在、“歴史・民俗・文化を学ぶ会”と“コスモス”の2つのサークルが活動しています。“歴史・民俗・文化を学ぶ会”は秋田県や近隣地域の古代史、偉人、民族文化を知ることが目的に、年数回、現地を探訪して見聞を広めています。また“コスモス”は有意義な学生生活を送るための諸々のことを考える会です。新しい会員の増加を図ることが最近の課題となっています。

同窓会は昨年1月に100名の会員で発足しました。発足に至るまでは多くの議論があったとのことでしたが、



秋田同窓会設立総会

1月の設立総会、6月の通常総会は大変和やかで、年1回の機関誌「千秋の里」発行、在学者への情報提供、放送大学の存在意義を高める活動の事業展開を確認しました。今後、会員の増加を図りながら、活発な活動が期待されるところです。

秋田学習センターでは、職員総動員で学生がより良い環境で学習できるように、和をもって腐心しています。その一つとして、学生の話をよく聞き、「いつも笑顔で、丁寧に、学生のために、」何かをすることにしています。

秋田学習センター

秋田市手形学園町1-1(秋田大学内) ☎010-8502
JR秋田駅から徒歩25分 電話:018-831-1997

いきいきと、鹿児島学習センター

島津の別邸、仙巖園へ続く磯街道（国道10号線）に面し、島津斉彬の城であった鶴丸城跡が目近に見える。そこに、江戸に上がるまで書物を読んで過ごした「篤姫」を思い浮かべながら勉学に励む学生、1871名は全国第14位、人口当たりの学生数は全国4位（2009年秋）、向学心旺盛な県民。鹿児島県は、北は高千穂の山々から南へ600キロ、種子島、世界自然遺産の屋久島、奄美大島等々、そして珊瑚礁に浮かぶ県最南端の与論島。そこに「いきいきと学ぶ」環境がある。

ホッと一息、息抜きの面接授業も

放送授業の合間に面接授業「焼酎学」と「カラオケ学」を開講（2009年度）。焼酎500年の歴史、文化と技術を学び、枕崎の焼酎蔵で杜氏さんと焼酎造り、利き酒も学ぶ。どれが芋、麦、米、黒糖からつくった焼酎か区別できたかしら。キビナゴ、薩摩揚げ、鶏刺しを肴に「だれやめ（疲れ休め）」、ほろ酔い加減で演歌を歌う、複式呼吸で消費カロリーアップ、ストレス解消、痴呆症になるものかと、音楽療法も学ぶ。カラオケの歴史は40年、日本発のKaraokeは世界を凌駕した。カラオケを「カラオケ学」にしようと8名の産学の講師が、それぞれの専門を視점에講義。

2010年度は、「・・・に学ぶ」シリーズを開講。「現代鹿児島“おごじょ”に学ぶ」、「鹿児島の老舗に学ぶ」、「鹿児島のお城に学ぶ」。今、鹿児島で活躍する女性の生き方、代々引き継ぐ匠の心と技を学び、鹿児島にも中世の城があったのだよと、地域の産学



杜氏さんと焼酎づくり

官の頑張り屋さんが熱っぽく講義するはず。鹿児島の素晴らしさに魅せられて、きっと元気澁瀬！

同窓会と一体となって

大きな行事に挑戦、大成功に結びつける。センター開設10周年（2008年度）、新設県立奄美図書館へ外視聴室移転（2009年度）記念の講演会、いも・黒糖焼酎を飲みながら、さつま料理、島料理を肴に石学長と懇談会を開催。卒業生・入学者、客員教授、センタースタッフの交流会の企画・実施、機関誌「結」（同窓会）、「かいこうず」（センター）も発行、卒・在生とセンターをコーディネート。奄美市で単位認定試験（ランチ試験場）を渴望、その熱意は2010年度から実現へ。



奄美大島での懇親会

サークル活動に客員教授も

食材だけのレシピ、家主センターの調理実習室で年末は「島津のお殿様の雑煮」をつくる。手作りの無農薬野菜を学生さんが提供。お肉は忘れて、何をどうして、どのようにしてつくるのか、話すことしきり、元料理長の学生さんが先生。食育も学びながら学生さんと客員教授が親密さを深める。

・・・いきいきと、明るい雰囲気がセンターに漂う。



料理サークル「ひまわり」

鹿児島学習センター

鹿児島市山下町14-50（かごしま県民交流センター西棟4階）〒892-8790
市電市役所前下車、徒歩3分 電話：099-239-3811

退任の挨拶

心理と教育 教授 西川 泰夫
人間発達科学プログラム



退任にあたり3つのことを記したい。まず第1点。今日の高齢化社会を担う当の一人として、任期満了のこの年まで働く機会を与えてくれた全国の納税者各位に感謝したい。もちろん私も納税者の一人であるが、このことは現在の社会の一つの特色である持続的・循環型社会を担う一員であることも意味し、ささやかながらも当方も社会人の役割を確かに果たしたことを自負したい。またこの背後には、あえて口にするともなかったが、当方の健康をはじめ毎日の仕事に専念できる環境を作った身内の人物にも言及しておきたい。続いて第2点。放送大学が提供する科目総数は、400科目になろうという数である。その中から、あえて当方の担当する科目を選び受講料を支払われた受講生各位には、特別の感謝を述べたい。その審美眼と知的好奇心を高く評価したい。第3点。過去、2度の転職を経験した。本学において過去にない実に多様で多彩な方々と出あった。脳の活性化を維持し高齢化にともなう生理的な衰えを劇的に防ぐ良い機会となり今後の活力の源をいただいた。以上、感謝とともにお礼する。

感謝! 感謝! 感謝!

社会と産業 教授 船津 衛
社会経営科学プログラム



放送大学での5年間は私の45年の教員生活の中でも最も充実したときでした。教材の収録・執筆、面接授業、卒論・修論の指導とめぐるしく、また、大変忙しい日々でしたが、よき同僚の温かい励ましに支えられ、何とかやり遂げることができました。心から感謝申し上げます。また、熱心に受講された学生の方々に感謝いたします。とくに私より年齢が上の学生さんから多くのことを教えられました。これまでの人生を集約し、自己を内省しながら、新たな展望を切り開いていく。論文執筆は初めてという方もあり、さまざまな試行錯誤を繰り返しながらも、すばらしい作品を次々と生み出していく。そのダイナミックな「進化」の過程はこれまでの高齢者のイメージをチェンジさせるのに十分でした。熱意をもって、たくましく生きるアクティブで、常に前向きで、新しいものを生み出していくクリエイティブなエイジングであると思います。私のこれからの人生のよきモデルを示してくれたことに感謝いたします。そして、いつも行き届いたご配慮をしてくださった安藤晶子さん(社会と産業コース事務補佐員)に感謝申し上げます。

現場への想い

人間と文化 教授 工藤 庸子
文化情報学プログラム



放送大学に着任して6年。かけがえのない年月でした。文学、歴史、映画、地域文化研究、言語政策、異文化との共生、等々、多様な関心をもつ学生さんとの出会いのなかで、あたらしいテーマの参考資料をあつめ、ともに学ぶことになりました。「生涯学習」に目覚めたのは私自身。定年まえに早めに辞める理由などなさそうです。大学の教員には「教育」と「研究」そして「校務」という3つの柱がありますが、これを均等に立ち上げるのは、なかなか大変なこと。誠実に社会人教育の現場にかかわりながら、静かに書物と向き合うことが長年の夢でした。放送大学には、さいわい柔軟な制度があって、専任でなくとも放送教材をつくり、卒業研究や修士論文の指導を担当することができますし、4月からは、東京世田谷学習センターの客員教授として、面接授業、公開ゼミ、研究会などのオーガナイズにあたります。学生の皆さんとの距離は、今までよりずっと近くなるのではないかと。そんな期待とともに、あらたな人生設計を始めたところ です。

Learning Based Society

ICT活用・遠隔教育センター 特定特任教授 内田 実



主に「インストラクショナルデザイン(ID)の普及の研究と実践」を行ってきた。セミナーやワークショップを放送大学や各所の大学等で実施し、毎年その受講者は数百人となった。IDとは教育の真のニーズ充足のために学習の効果・効率・魅力向上を図る方法論である。学習を単なる知識や技術の習得による変容と捉えるのではなく、何のために学習するか考え、そのニーズを達成することを目的とするということである。学校での学習も社会等のニーズに基づき行い、学校を卒業した後も常に新しいニーズを発掘して継続して学習していくことが必要である。これを示す言葉として私は「学習基盤社会: Learning Based Society(LBS)」を提案している。繰り返し継続的に学習を続け、自分も含む社会を変革していくという意味である。生涯学習をサポートする放送大学はこのLBSの中で、今後ますますその重要性が増してくると考える。

退任挨拶

ICT活用・遠隔教育センター 特定特任教授 山村 弘



放送大学には旧(独)メディア教育開発センター在籍を含め5年間お世話になりました。平成17年4月に富士通(株)を退職後、旧(独)メディア教育開発センターで「高等教育機関等卒業生に求められる能力の開発とシステム化」というテーマで、主に社会から求められる能力開発に関するコンテンツ開発を行ってまいりました。ここでは、私は主に「人間力系」のコンテンツ開発に取り組みましたが数々のユニークなコンテンツの研究ならびに開発を行うことができました。また、教育の質保証に関しては数度の海外調査ならびに質保証に関する国際シンポジウムに参加するなど今までない素晴らしい経験をすることができました。また、一般企業との共同研究では先進的なLMSのあり方についての調査にも参加し実践的な研究にも参画させていただくことができました。最後の一年間は統合後の放送大学に属しましたが、今後とも放送大学が世界で有数の先進的なディスタント・ラーニングの拠点として、今までのノウハウを活用しますます発展されることをお祈りいたしております。お世話になりました。

北海道学習センター 富田 房男

平成15年4月から7年間貴重な体験をさせていただきました。所長とは地域の営業担当と心得て、学生へのサービスを第一とするつもりで、北見・帯広・函館に試験会場を開設しました。お陰で学生数も減らすことなく過すことができました。私は、全国をカバーする大学として地域の特徴・独自性を生かす為にSCの充実した運営が大切と信じております。そのため50SCと7SSの全てを訪問し、各施設の特徴を見させていただきました。その結果、格差の大きさに驚いております。次の目標はこうした格差を何とかすることと博士課程を作ることと思っております。



岩手学習センター 中嶋 芳也

平成18年から4年間、大変お世話になり、ありがとうございました。この間の印象はとても強く、予想もしていなかったような戸惑いもありましたが、以前の大学では経験したことがないような驚きや喜びも味わうことができ幸せでした。



何よりも学ぶ意欲に燃え、強い意思とエネルギーに満ちた学生さん達との出会いに感動しながら、数々の新鮮な体験をさせていただきました。学生さん達が快適に学べるアットホームな環境づくりに努めてまいりましたが、学生相互ならびに学生と教職員の交流の場として、さらにその機能を高める必要があるように思います。放送大学の益々の充実と発展を祈念しております。

福井学習センター 中村 圭佐

放送大学福井学習センターに勤めて、それまでの経験とは違う、驚いたことが幾つもあります。その最たるものが、ここに学ぶ学生諸氏の存在です。自分で学費を捻出し、時間を作り、自ら学ぶ。このことは放送大学では当然のように思われていますが、非常に大切なことで、皆で再確認すべきだと思っています。それを実践している・実践しようとしている学生諸氏に敬意を払いつつ、せめてもの私の応援歌として「継続は力なり」と訴え続けてきました。退任に当たり、全国の学生諸氏に、この応援歌を声高らかに贈ります。



岐阜学習センター 後藤 宗弘

7年間この職を楽しく務めさせて頂いた。初めの1年は大学の組織、職務内容の理解、2年目からはセンター内の改善。以降、職員の方々のご協力により、センターは機能を十分果たしたと感じている。放送大学の教育現場は、放送授業と面接授業。今後、これらの内容と授業形態の、社会の変化に応じた変更が必要。知識のリフレッシュを目的とした学生であっても人対人の教育が望ましいから。学生諸氏、センター、本部の方々に深謝する。



愛知学習センター 塚越 規弘

赴任当初、多様な学生さんが孤独に、また、異なる世代の学生さんが共に学習しているセンターでの学生さんへの対応は複雑で大変だと思ったが、幸い多くの学生さんに支えられ、この7年間無事に乗り切ることができた。また、面接授業の担当、卒業研究の指導、放送教材の制作などで本学の教育にも貢献できた。特に、全国に先駆けてDNA実験を面接授業に導入し、学生さんに組換え体DNAを体験させることができたことを自負している。今後は本学の一学生として学習を継続する予定である。



奈良学習センター 水上 戴子

放送大学には奈良学習センター所長として3年間お世話になりました。放送大学は、日本全国に放送大生が学んでいて、全国の多くの他大学の先生方によって支えられているという何ともユニークな大学だと思います。学習センターでは、学習意欲と熱意に満ちた多くの学生さんとの出会いがあり、学生さんに少しでも満足して学習していただけるように微力を尽してきました。放送大学のますますの充実とご発展をお祈りいたします。



福岡学習センター 押川 元重

レベルの高い沢山の放送授業科目を勉強することができた7年間でした。放送教材15回分を1週間くらいでテキストを見ないで視聴し、それから1週間くらいかけてテキストを読むという方法は、学習センターにいたからできました。大学レベルの学習に適していると感じる1科目ごとに集中した学習が、インターネット配信の拡大やいつでも受験できるシステムの導入などによって可能になることを夢見ながら、所長から学生に变身します。



大分学習センター 神戸 輝夫

六年間お世話になりました。何よりの収穫は年代の違う多くの学生さんと知り合いになれたことです。現在学生さんたちとセンターの小ゼミで「廣瀬旭荘日記(漢文)」を読んでいます。皆さん熱心ですので、退職後は私一学生として学習センターの一員になり、このゼミを続けたいと考えています。学生さんたちが楽しく、気持ち良く学習できるセンターづくりを目標にしましたが、少しは達成できたのではないかと思います。放送大学の更なる発展を祈念します。



熊本学習センター 柏木 潤

熊本大学を退職後、5年に亘って大変楽しく勤めさせていただき、お世話になりました皆様へ厚くお礼申し上げます。この間、必死になって勉強していらっしゃるたくさんの学生さんたちをみて、生涯教育の重要性をつくづくと感じ、また自らの今後の人生について深く考えさせられた5年でした。そして放送大学がもっと魅力的な大学になるためには、「いつでも入学できる」という入学時期の弾力化が必要ではないかと思っています。



沖縄学習センター 比嘉 辰雄

放送大学の皆さん、3年間の在任中は大変お世話になりました。本学がここ2、3年いろいろと改革を実行して来られましたことを大いに評価したいと思います。放送大学の更なる発展のために、今後本部及び学習センター職員のプロパー化推進やより柔軟な運営等、なお一層の改革を断行されますよう期待します。専任教員が面接授業等で全国各地の学習センターを訪れて地域への理解を深めることも重要であり、地方での面接授業担当を増やすことも併せて要望します。



2010 (平成22) 年度大学院 文化科学研究科 (修士全科生) 入学者選考結果

教務課

修士の学位取得を目指す大学院修士全科生に427人が合格しました。

プログラム名	生活健康科学	人間発達科学	臨床心理学	社会経営科学	文化情報学	自然環境科学	計
募集人員	90人程度	60人程度	40人程度	120人程度	120人程度	70人程度	500人
出願者数	130人	119人	423人	139人	123人	74人	1,008人
合格者数	78人	50人	37人	110人	97人	55人	427人
倍率	1.7倍	2.4倍	11.4倍	1.3倍	1.3倍	1.3倍	2.4倍

※倍率は出願者数/合格者数

夏季集中科目の学生募集が始まります

広報課・学生課

夏季集中放送授業期間に「学校図書館司書教諭資格取得に資する科目」、「看護師資格取得に資する科目」を開設します。学生募集等の日程は下記のとおりです。

	学校図書館司書教諭資格取得に資する科目	看護師資格取得に資する科目
学生募集要項配布	平成22年4月1日(木)～	平成22年4月1日(木)～
出願受付期間	平成22年5月1日(土)～5月31日(月)	平成22年5月1日(土)～5月31日(月)
放送授業期間	平成22年7月22日(木)～8月8日(日)	平成22年7月22日(木)～8月8日(日)
通信指導提出期限	平成22年8月17日(火)	平成22年8月17日(火)
単位認定試験	平成22年10月20日(水) (単位認定試験レポート提出期限)	平成22年9月24日(金) 平成22年9月25日(土) いずれか1日を選択

夏季集中科目の受講を希望する方は、大学本部広報課又は最寄りの学習センターまでご連絡ください。この要項はご連絡いただいた方のみに配布します。在学生が履修を希望される場合にも科目登録申請要項(夏季集中型専用)を入手して、必要な手続きをお願いします。

2010 (平成22) 年度第1学期面接授業科目の追加登録について

学習センター支援室

科目登録決定後に、空席のある面接授業科目については追加登録をすることができます。

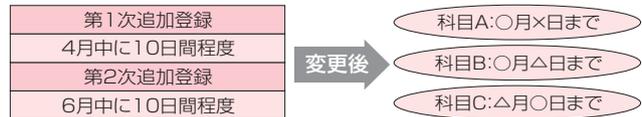
空席状況(追加登録の対象となる科目)は空席発表日以降、各学習センターの掲示・キャンパスネットワークホームページでお知らせします。

受講したい科目をご確認のうえ、科目ごとに定められた追加登録受付期限までに、その科目を開設する学習センター・サテライトスペースへ申請してください。

※具体的な日程、申請方法などくわしくは「面接授業開設科目一覧」「面接授業時間割表(各ブロック版)」をご覧ください。

平成22年度から追加登録を見直し、皆様が利用しやすい手続きに変更いたしました。

①科目ごとに追加登録受付期限を定め、登録機会を増やしました。



②原則として、開講日の1週間前まで受付を行いません。



授業準備の都合上、追加登録を受けられない科目、または1週間前まで受けられない科目がありますのでご了承ください。

編集後記

「放送大学アクション・プラン2010」。その前文には、「学生と大学との間の円滑なインターフェイスの構築」「世界に通用する生涯学習機関としての確立」の2つを特に重視して、プラン構築がなされたと記されています。今回のON AIR NO.97には、まさしく、上の2つにかかわる記事が満載されています。

巻頭の鈴木基之教授と国際連合大学学長・オスターヴァルダー氏との対談はもちろんのこと、放送大学叢書、改訂科目紹介、センターおよびサークルだよりなど、すべてがアクション・プランの2つの柱につながっています。ON AIRの果す役割の重要性を実感しています。(宮崎清)

ご意見やご感想をお聞かせください。メールアドレス editor@u-air.ac.jp

放送大学通信 オン・エア 編集委員 (平成21年度)

- 委員長 教授 松村 祥子
- 委員 准教授 岡崎 友典
- 教授 鈴木 基之
- 教授 島内 裕子
- 准教授 二河 成男
- 准教授 大西 仁
- 千葉学習センター所長 宮崎 清
- 編集事務担当 総務部広報課



放送大学

http://www.u-air.ac.jp/ ISSN 1343-3369